小平和の徴

坂元美穂子

バハイ世界は、2001 年 1 月をもって、「形成時代」の「第 5 期」に入った。「形成時代」の後には「黄金時代」という世界文明の時期が到来すると言われているが、それいつになるかは、形成時代における我々の努力にかかっている。そのバハイの仕事は「神の小計画」と呼ばれているが、それは「最大平和」につながる。それに対して、バハイの外で進んでいく、神のみが知る計画は「大計画」と呼ばれ、それは、「小平和」つまり政治的な和合へとつながっていく。小平和は光の世紀と呼ばれる 20 世紀の終末に到来すると言われているが、その兆候として、国家間の和合、古い政治制度の崩壊、国際的行政機関の出現、NGO の国際的活躍、欧州における通貨制度の統一、男女の権利の平等化などが上げられる。

緒言

バハイ社会は現在、普遍的周期の中の形成期第五期に入りました。この形成期は、ショーギ・エフェンディが守護者となり万国正議院が創設され、バハイの行政機構が更に発展する時代です。形成期がどの位の期間続くのかは未定ですが、やがてバハオラの世界秩序が確立され、最大平和が訪れると、それからは黄金時代と呼ばれるようになります。

小平和とは、世界的なレベルで、戦争をすまいとする協定のようなもので、政治的な努力によってもたらされます。アブドル・バハは、小平和が二十世紀の末までに実現されると述べています。小平和に対し、大平和あるいは最大平和という概念があります。最大平和は, バハイ信教の信者の尽力およびバハオラの啓示された法や原則の直接的な力と, バハイ世界の最高機関としての万国正議院の働きによって築かれます。そして、人類が精神的に内面から変革され、心からの平和が実現します。バハオラは小平和と最大平和について次のように述べています。

バハオラの宣布・全ての国王、為政者へ

おお、地上の国王達よ。あなた達は、毎年それぞれ経費を増額して、人民達にその重荷を負わせているのを見受ける. ・・・・

あなた達は、いまや、最大平和を求めようとはせずに、自分自身や一族の状態を幾分なりとも改善しようとして、小平和にすがりついている。

一つに団結せよ。地上の国王達よ。もし、あなた達が理解するなら、それによって、あなた達の間の不和の嵐は静まり、国民は平安を見出すであろう。もし、万一、あなた達の誰かが、他に向かって武器を取った場合には、他の全員は、そのものに向かって立ち上がらなければならない。これは、正義をあらわす以外の何者でもないからである。

(バハオラ、「バハオラの宣布」、pp.15-16)

これについて、ショーギ. エフェンディは、1936年に書かれた「世界文明の展開」の中で次のように説明しています。

人類全体の力でいろいろな機構が案出されるでしょう。しかし、その機構がバハイに啓示されている基準に達せず、バハオラの教えに定められた崇高な制度と矛盾しているならば、それは、私たちの信教の創始者自らがその書の中で言及している「小平和」以上のものを達成する事は絶対にできません。「汝らは、最大平和を拒否した以上は、みずから人民の状態をいくらかなりと改善する為に、この小平和に確固とすがれ」とバハオラは世界の為政

者と国王に警告して書きました。世界の為政者に当てた同じ書簡の中で、バハオラはこの小平和について詳しく説明しています。「汝らの属領と領土を守るに必要な兵器以外は、不必要になるように互いに和解せよ・・・・おお世界の国王達よ、不和の嵐が汝らの間で静まり、人民が平安を見出せるよう互いに和解せよ。汝らのうちの誰かが他に向かって武器をとれば、全てのものは、そのものに向かって立ち上がれ。それは、明らかな正義に他ならない。
（ショーギ・エフェンディ、「世界文明の展開」、p. 3）

「神の小計画」と「神の大計画」

次に、「神の小計画」と「神の大計画」という概念から「小平和」と「大平和」について考えてみました。

「神の小計画」は、バハオラが、バハイの信奉者に与えたティーチング、行政活動、バハイ共同体建設の計画で、それはアブドル・バハ、ショーギ・エフェンディ、万国正議院により徐々に具体的に展開されてきました。最近で言えば、1996年に始まり2000年に終了した四年計画があげられます。これは、バハオラの信奉者として意識的に活動しているもののみに与えられた仕事で、バハイのみができうる仕事です。行政の仕事、伝道の仕事などです。「大計画」の方は、神のみが知りうる方法で、人類全体を成熟へ平和へと導いていく計画で、バハイの計画とは別のものです。冷戦の終結、環境サミットなどといった出来事は、バハイがある程度関係したとしても本質的にはバハイの外で、独自のペースで起きている事です。これは神が進めている計画だというのです。そして興味深いのは、バハイに与えられた具体的な計画が「小計画」ですが、その最終目標が「最大平和」であるということです。
（尊田、「予言について考える」、p. 82）

また、万国正議院メンバーであるピーター・カーン博士の最近の講演(1999)によると、過去（バブとバハオラ以前）の神の計画の目標は、「和合、調和、文明」の推進ですが、現代の顕示者の時代、つまり 19 世紀にバブとバハオラが出現した時、神の計画の目標に「人類の精神化」が追加されたと述べています。カーン氏はこう述べています(1999)。

顕示者が出現すると、世界中に不思議な精神的エネルギーが放出されるのです。それはあらゆる存在物を変えてしまう力です。十九世紀にバブとバハオラが出現した時、私たちの想像を絶する事が起こったのです。守護者ショーギ・エフェンディによれば、バハオラの精神には「創造力、浄化力、変革力」が備わっています。それは世界を揺るがし世界と活性化し、世界を救済する精神であり、人類が今日直面している危機はこの精神が呼び起したエネルギーにその原点があるのだと守護者は説明されています。守護者が著した「神聖なる正義の到来」(*The Advent of Divine Justice)*に次のように書かれています。

神に由来するこのエネルギーに対抗しえるものは無く、その威力を計り知る事はできず、それが辿るであろう道を予見する事も不可能であり、その働きは神秘に満ち、その出現は脅威である。このエネルギーは「全ての存在の奥底で振動する」とバブは述べ、その震えんばかりの影響力によって世の中の平衡状態はくつがえされ、人類の整然とした生活は大改革された」とバハオラは述べている。（Shoghi Effendi, *The Advent of Divine Justice*）

二十世紀は光の世紀、輝きの世紀、人間性の世紀

アブドル・バハは、二十世紀を光の世紀、輝きの世紀と呼んでいます。また世界平和が実現されるのには、七つのプロセスがあり、それを七つの和合のローソクに例えています。そしてアブドル・バハが二十世紀中に実現するといったのは、五番目の「諸国の和合」です。

人類家族の全メンバーは、ますます相互に依存しあうようになってきている。このことに関しては国民も政府も、都会人も田舎の人も同様である。教育の絆は毎日のごとく強化されているので、誰も自給自足することはできなくなったからである。この故に、今日全人類の統合を達成する事が可能である。誠にこれは、この不可思議の時代、この栄光ある世紀における脅威のほかの何者でもない。過去の時代はこのような脅威を有する事は無かった。今世紀は光の世紀であり、無比にして前例の無い栄光と脅威と光明がこの世紀に付与されているのである。この故に毎日のように新しい不思議が驚異的に発展され、遂に人類間にそのローソクがいかに輝かしく燃え立つかを示すようになるであろう。
(アブドル・バハ、「バハオラと新時代」に引用、p. 285)

ついに、この光の世紀が始まった。真実が明らかにされ、人間の目から隠されてきた神秘が顕にされた。これら明らかにされた真実の中には、男女の平等の原則がある。この原則は今やアメリカ、ヨーロッパ、東洋と世界中に認められている。(アブドル・バハ、*The Promulgation of Universal Peace*)

第五のローソクは国家の和合

最初のローソクは政治の分野における和合である。今その最初の徴を見る事ができる。第二のローソクは世界的計画における思考の一致である。間もなくその達成を目撃できよう。第三のローソクは、近く必ずや実現されるであろう自由における和合である。第四のローソクは宗教の和合である。それは、それ自体が土台の基礎となり、神の力によってその輝きを全てに明らかにするものである。第五のローソクは国家の和合である。これは今世紀中にしっかりと打建てられ、世界中の人々は互いを一つの祖国の市民とみなすようになるであろう。第六のローソクは人種の和合で、地球上に住む全ての人々は互いを同族と見なすようになる。第七のローソクは言語の和合である。つまり、全ての人々が教えられ、用いる国際共通語を選択するのである。これら全ては必ず現実の事となろう。なぜなら神の王国の力がその現実化を助け、援助されるからである。(*Selections from the Writings of Abdu'l-Baha, 15.7., pp.35-56*)

小平和と最大平和のその意味とその時期に関してバハオラが世界大戦を経て確立されると言及されている事についてのあなたの質問に対し： 小平和は世界中の国家や州や政治的な努力によってもたらされるものであり、バハイの計画や努力との直接的な関連は無い。最大平和は、者の尽力およびバハオラの啓示された法や原則的な力と、バハイ世界の最高機関である万国正議院の働きによって築かれる。このようなあなたの理解は全く正しいし、「世界文明の展開」の中で守護者が具体化して示されているものと一致する。(ショーギ・エフェンデイ、代理の手紙年3月14日、北米・カナダ全国精神行政会及びある信者へ)

小平和にも段階がある。最初の段階では各政府は信教を意識的に巻き込む努力をすることなく全く自分達だけで行動する。後になると、神のよき時代で、信教はこの事に直接的な影響を及ぼす。それは、「新しい世界秩序のゴール」という著書でショーギ・エフェンディが示唆しているような方法で行なわれる。この段階の後期になると、万国正議院が聖なる書の示す指導に沿って何をすべきかを決める。現時点ではバハイたちは今まで通り平和達成の為に精進する事になろう。(万国正義の代理の手紙、1985年1月31日)

人類は二十世紀に入って二度の世界大戦を経験しました。第一次世界大戦では、機関銃、戦車、航空機、潜水艦といった近代的兵器が本格的に使用され、約1500万もの死者が出ました。第二次世界大戦では、初めて原子爆弾が使用され、この戦争で4000万人以上の尊い命が失われました。その後、国際連盟に代わる新しい国際平和機構を作る構想が立てられ、国際連合が誕生しました。

冷戦が終結し、ソ連邦が崩壊しましたが、戦争は民族紛争・域紛争の形で繰り返されています。さて、小平和は二十世紀に達成されたといえるのでしょうか。

小平和を示す徴とは何か

二十世紀というと、人類の犯したおびただしい流血に目を奪われがちですが、小平和の徴を示す出来事にはどのようなものがあるのでしょうか。まず、小平和はプロセス、つまり現在も歴史の中で進行しているものであり、既に出来上がっているものではありません。小平和を示す徴としては、政治面ではソ連邦の崩壊、中国の自由化、南北朝鮮の会談、中東和平会議、二千年国連ミレニアムサミットが挙げられます。経済面ではヨーロッパの共通貨幣ユーロの導入、軍事面では兵器の削減と地雷撤廃の協定、法律面では国際刑事裁判所の為のローマ規定などが挙げられます。またインターネットコミュニケイション、男女の平等の原則の普及などが挙げられます。以下、これらの出来事を新聞記事などを基に順を追ってまとめていきます。

国連ミレニアムサミット[1]

六日開幕した国連ミレニアムサミット。世界150カ国以上の首脳らが、グローバリゼイション（経済の地球規模化）の影響や平和の問題など一番訴えたい事で、5分の制限時間で次々と発言する姿は、やはり“圧巻”です。発言内容から、世界平和のルールの擁護者としての国連の存在意義が浮かび上がっています。

「短い演説で世界を変えることは出来ないが、戦い合っているよりは話し合っている方がいい。もし国連というものが無かったならば、我々は（新たに）国連をつくっていただろう」英国のブレア首相は、こう演説し、今日の世界での国連の存在意義を巧みに表現しました。六日午前に行なわれたイスラエルのバラク首相とパレスチナ自治政府のアラファト議長の演説の応酬は、この指摘を裏書するような光景でした。

政府の基盤の弱さから中東和平達成に残りの時間の少ないバラク氏は、「自分の夢を百パーセント達成して（和平を）成功させる事は出来ない」とパレスチナ側に妥協を求めました。これに対してアラファト氏は、「パレスチナの歴史的領土の四分の一の国家を受け入れるなど大きな努力をしてきた」と応じ、「最後のチャンス」を迎えているかもしれない和平達成への努力をする姿勢を示しました。

半世紀近い軍事紛争の当事者が国連の場で緊張したエールを交わす姿は、国際紛争の平和的解決という国連の基本原則が定着しつつある世界の現状を浮き彫りにしていました。

国際刑事裁判所

> コソボや東チィモールなどで紛争が続発している中、軍隊や民兵などの武装組織による大量虐殺、虐待、暴行、拷問などの非人道的行為が問題になっている。戦争犯罪を含め、こうした人道に反する罪を犯した個人を罰しようというのが国際刑事裁判所である。
>
> 非人道的行為を行なった個人の責任の追及は、第一次大戦後のベルサイユ条約にその起点を見出す事が出来る。（中略）最近では旧ユーゴスラビアやルワンダの事例で臨時に国際裁判所が設立された。国際世論もこれに一定の評価を与えた事が追い風となり、1998年6月、ローマで常設国際刑事裁判所のための国際会議が開かれた。五週間にわたる論議の結果、賛成120、反対7，棄権21で国際刑事裁判所（ローマ規定）が採択された。
>
> （中略）（ローマ規定は）国家の主権を尊重しつつ，国際法を直接の根拠規範として個人を審理し処罰するという新たな法の枠組みを構築する画期的なものである。（中略）現在の国際情勢の中で，国際刑事裁判所の設立については、「法の論理」と大国の思惑などがぶつかり合い、生みの苦しみを余儀なくされている。しかし、このような時にこそ、国際

[1] 坂口、2000

世論を喚起して、重大な国際犯罪について、国境を超えてこれを裁く法のシステムを整える必要性が広く認識されなければならない[2]。

現在、ローマ規定の批准は27か国，署名は139カ国です。2000年12月31日にイラン、イスラエルそしてアメリカ合衆国が署名しました。

NGOと対人地雷廃絶運動

赤十字国際委員会によると，現在、世界中に1億1900万個以上の地雷，アフガニスタンでは、1000万個という数の地雷があって、紛争解決後にも悲惨な事件が相次いでいる。しかし，地雷は本来，防御兵器であるとして，規制に反対する声が強い。

ベトナム退役軍人財団（VVFA）とハンディキャップ・インターナショナル（HP）が協力して1991年に発足したICBL（International Campaign to Ban Landmine 地雷禁止国際キャンペーン）は，発足以来一貫して対人地雷廃絶の必要性を世界に訴えてきた。しかし，少なくとも1996年までは，ほとんどの国が彼らの訴えに耳を貸そうとはしなかった。その為、1991年以降の地雷廃絶運動は、世界各国における、NGOの会議という形で細々と広がっていった。 しかし、地雷廃絶におけるNGOの情熱は，少しずつ世界を動かし始めた。その流れが、1996年9月のオタワ会議、1996年12月の国連総会決議、「対人地雷を使用，備蓄、生産、輸出の全段階で禁止する国際条約」を締結。1997年10月，ノーベル平和賞受賞者に、ICBLとその事務局長であるジョディ・ウイリアムズ氏が決定した。ICBLの対人地雷に向けた努力がノーベル平和賞という形で評価されたという事実は，オタワプロセスの最大の弱点と見られていた「普遍性の欠如」という問題を一気に解決してしまった。ノーベル賞という数ある国際的な賞の中でも抜群の普遍性を持つ賞を受賞した事で，「地雷の即時全面禁止」は人類にとって普遍的なテーマとなったに等しい（神保、p.365-366）。

> さて、軍備撤廃の問題においては一つや二つの国ではなく，全ての国々が実行に移さなくてはならない。したがって、あらゆる国のあらゆる人が平和を愛し、世論が協力で安定した地位を得、そして国際平和を目指す軍隊が日毎に増え、完全な軍備撤廃が実現され、地球の山々の頂上に国際的な和合の旗がなびくよう、平和の支持者達は日夜努力しなければならない。（アブドル・バハ、「明日への扉Ⅱ」、p.27）

単一通貨ユーロ

ヨーロッパ統合の最大の成果は，ユーロという単一通貨が発足したことである。 国家主権の象徴であった通貨が，今や国際協調の象徴になった。1997年、欧州通貨制度(EMS)が合意された。主権国家を支持する国からは「エスペラント通貨」とすら揶揄されたが、いまや各国政府や議会からも独立した中央銀行によって発行されることが同意された。EMSはどちらかといえば、ドイツの金融力に対抗するフランスの努力でできた。最大の問題は、ドイツ・マルクと他の通貨との為替の調整であった。英国，デンマーク、ギリシャ、スウェーデンを除き、11カ国で発足し、1998年5月に通貨統合がなされ、ドルに匹敵するヨーロッパ共通の通貨、ユーロが誕生した。（下斗米、北岡、p.78）

女性の権利と男性との平等性に関して

> 人間の世界は，男性と女性という二つの翼から成り立っている。この二つの翼の強さが同等でなければ鳥は飛び立たない。女性が男性と同等の地位に達し，女性が同等の活動舞台を得ない限り，人類の非凡なる達成は実現できない。人類は，真の達成の頂きに飛んで行く事ができないのである。この二つの部分の強さが等しくなり，同等の特典を得た時，人類の飛行は非常に高く，驚くべきものになるであろう。したがって，女性は男性と同じ教育を受け，全ての不平等は正されなければならない。（アブドル・バハ、「明日への扉Ⅱ」、

[2] 安藤、2001

p.12)

女子小学生の交通事故死をめぐって，生きていれば得られるはずの「遺失利益」[3] をどう算定するかが争点となった訴訟の判決で，東京地裁の川辺義典裁判長は八日，女子労働者の平均賃金を使って算定するこれまでの方法を「性の違いで差別する側面があり平等の理念に照らして適当でない」として用いず、男女を含めた全労働者の平均賃金で算出する事で額を引き上げる判決を示した。遺失利益の計算は、統計上の計算で，交通事故で死亡した場合，今までは男性が年収562 万円，女子が 345 万円として計算した。今回の判決により，男女とも 497 万円とし算定する事とし，損害賠償額に男女の差を無くした。この日の判決は，見直しの背景を，1．年少者は，将来多様な就労の可能性があるのに，現在の男女の賃金格差を算定に反映するのは女子の可能性を性の違いで差別する側面がある。2．最近では女性をめぐる法制度，社会環境が大きく変化して賃金格差の原因になっている就労の形態も変わってきており，男性の占めていた職業にも女性が進出しつつある。なお、これは「未就労の年少女子が死亡した場合」と限定した。（「女児の遺失利益の算定：男女平均賃金で」、2001）

世界的平和は地球の真中にそのテントを掲げ

アブドル･バハは将来必ず訪れるであろう世界的平和について、次のように言われました。

> この不思議な周期には，地球は変化し，人類は平和と美に装われるであろう。各国民や民衆や種族や国家間には愛と友情が現れるであろう。協力と同盟が樹立され，遂には，戦争は全く絶滅されるであろう････世界的平和は地球の真中にそのテントを掲げ，幸せな生命の木は地球の東西に陰を落とすほど繁茂するであろう．狼と子羊，豹と山羊，獅子と子牛のごとくである強者と弱者，富者と貧者，敵対する宗派や国家は，相互に最も完成した愛と正義と公正を持って行動するであろう。世界は，科学と，生物の秘密の現実の知識と，神の知識を持って満たされるであろう。（アブドル・バハ、「バハオラと新時代」、pp.182-183）

引用文献

「明日への扉 II」。尊田編纂･翻訳、全国バハイ翻訳校閲委員会監修、バハイ出版局、1988 年。

アブドル･バハ(Abdu’l-Baha). *The Promulgation of the Universal Peace. Talks delivered in the United States and Canada in 1912.* English translation given during the talks. Wilmette: Baha' i Publishing Trust, 1982.

――. *Selections from the Writings of Abdu’l' l-Baha.* Comp. the Research Department of the Universal House of Justice. Trans. A Committee at the Baha’i World Centre and Marzieh Gall. Haifa: Baha'i World Centre, 1978.

安藤泰子、朝日新聞、「国際刑事裁判所」、2001 年、3 月 2 日。

バハオラ（Baha’u’llah）.「バハオラの宣布」. 日本バハイ全国精神行政会訳、バハイ出版局、1970 年万国正義院、代理の手紙･北米･カナダ全国精神行政会並びに一信者へ 1939 年 3 月 14 日、1985 年 1 月 31 日。

エッセルモント、ジョン、「バハオラと新時代」、バハイ出版局、1984 年。

神保哲生･「地雷リポート」築地書館 1997 年。

「女児の遺失利益の算定：男女平均賃金で」、朝日新聞、2001 年 3 月 9 日。

カーン、ピーター。講演、1999 年 8 月 20 日。

坂口明、しんぶん赤旗、2000 年 9 月 8 日。

ショーギ･エフェンディ(Shoghi Effendi)、*Advent of Divine Justice*,Wilmette: Baha’i Publishing

[3] 遺失利益とは、事故に遭わずに生きていれば将来得られたと思われる収入のことを言う。

Trust, 1984.
―――、「世界文明の展開」、バハイ出版局、1991 年。
下斗米伸夫、北岡伸一、「新世紀の世界と日本」（世界の歴史 30）、中央公論新社 1995 年。
尊田望、「輪廻転生について考える，予言について考える」、ワンワールド・インタナショナル、2000 年。